

在宅で健やかに生きるためのわざ

秋山 正子

(株式会社ケアーズ白十字訪問看護ステーション統括所長)

21世紀は多死の時代、病院で亡くなる人の比率が上がり、病院に行かなければ死ねないとまで思えるほどに、急性期医療の医療者も考えていて、患者・家族も病院へ行くのが当然と考える風潮が強くなった。死の病院化・病気の病院化が起こっているが、在宅で健やかに生きるには、在宅医療・看護の普及は必須である。

いつまでも生きてほしいと願う子供の世代の考えに揺れてしまい、本人の望まない状態での病院の看取りもある中、地域での医療・介護との連携の中で、本人や、家族が納得できる高齢者の看取りができることもあり、その過程から学ぶことは大きい。

質の高い End of life care を支えるには、予防の視点から考えることが重要であり。急性期医療との連携、在宅医療・介護の連携、介護者も支える地域ネットワークの活用、そして看取りへ向けた質の高いケアが大切となるが、このどこのプロセスにも、看護は重要な役割を持つ。治す医療から支える医療への転換はすでに起こりつつあり、それを支えるには多くの地域の他職種と組んだネットワークの構築が重要であろう。

訪問看護は小児から超高齢者までを対象とし、家族の健康問題にかかわり、潜在ニーズを引き出し、適切な医療につなげ、重度化を予防し、穏やかな看取りを支援するといった一連のプロセスに関与している。救急車をむやみに呼ばない市民を作ることも大切である。

行政に働きかけをして、急性期病院の看護師に在宅の経験をしてもらう研修を取り入れた。また、市民向けの講座も毎年企画している。

日ごろからの在宅療養の普及・啓発は大切であり、健康寿命の延伸のためには、日ごろの健康不安に対応しながら、地域ぐるみで、高齢者を支えていくことが必要と考える。

その一つのあり方として、高齢化率の顕著な戸山ハイツに開いた暮らしの保健室の活動の一端も紹介した。

勇美財団発行の暮らしの健康手帳も紹介し、日ごろからの健康に暮らす手がかりに活用を呼びかけた。
